

【レジュメ】

『村の司祭』解説— 一女性の魂の歴史

(『仏文研究』16号、1986年9月、pp.119-142)

村田京子

バルザックの『村の司祭』においては、一人の女性（女主人公ヴェロニック）の誕生から死に到るまでが一貫して描かれている。しかし、バルザックは皮相的な事象のみに終始し、主人公の時間の流れを追った心理過程には少しも触れていない。だが、彼が『人間喜劇』の「観察家」に与えた特別の能力（「第二の眼（*seconde vue*）」）を鑑みるに、我々も「観察家」となって外的事物の描写の中に隠されたヴェロニックの「魂の物語」を解説する必要がある。その指標として、主人公の身体的特徴の変容と、自然描写を取り上げる。

①身体的特徴の変容：物語の最初に現れる、9歳時の彼女の聖母マリアのような顔つきは「天使的存在」「非物質性」を具現している。次に彼女は天然痘に罹り、醜くなるが、その顔は「地上的要素」の侵入を表わしている。以後、結婚、タシュロンとの恋愛、出産、モンテニャックでの灌漑事業など、人生に起こった事件のたびに彼女の顔色は、白→褐色→灰色→白→黄色→白へと変化し、体つきも「*sinueux*」→「*anguleux*」→「*bossué*」→「*anguleux*」へと変貌する。彼女の純潔な魂がその純粋性、澄明性を失うにつれて、顔色は濁り、鈍重さを帯びてくる。このように、彼女の外貌に付きまとう天上的要素と地上的要素の混在は、肉体と精神の相克を浮き彫りにするものである。死の直前に、不純な要素が消し去られ、元の「天使の輝き」を取り戻したことは、精神と物質の対立が止揚され、バルザックが目指す「*Unité*」に達したことを意味する。

②自然描写：『人間喜劇』において、自然と登場人物の心理との照応がしばしば見られるが、『村の司祭』も例外ではない。モンテニャックの不毛さは、ヴェロニックの心の不毛な状態に対応し、自然の織りなす「不毛」と「豊饒」のコントラストは、彼女の内の発達した意識の部分と、抑圧された無意識の部分を示している。自然の中でもとりわけ「水」は、「生」と「死」という象徴的役割を担い、不毛な平野に水路を引くことが、ひいては彼女の中の暗い情動に光を当て、意識化することにつながっている。それまで破壊的に働いていた情動が、意識化によって逆に、創造的な力を及ぼす。それが彼女の外貌の変化に反映され、美しく豊かに変容するモンテニャックの平野として外在化されている。

以上のように『村の司祭』は、内部の源泉から沸き起こってくる無意識の力を意識に取り入れ、統合性の高い人格へと発展させていく一人の女性のドラマと言えよう。